

Morphologic and clinical differences between Early-and Late-onset obsessive-compulsive disorder:Voxel-based Morphometric study

猪狩, 圭介

<https://hdl.handle.net/2324/1866269>

出版情報：九州大学, 2017, 博士（医学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（2）

氏 名：猪狩圭介

論 文 名：Morphologic and clinical differences between Early- and Late-onset obsessive-compulsive disorder: Voxel-based Morphometric study

(強迫症患者の発症年齢による臨床像と灰白質体積の差異について
：ボクセル単位形態計測法)

区 分：甲

論 文 内 容 の 要 旨

【目的】脳の形態変化を強迫性障害（OCD）の発症年齢により分類し、健常者と比較検討することを試みた。【方法】OCD患者92例と健康者146例を対象に、3Tスキャナを用いて脳MRI検査を行った。初めにボクセル単位形態計測により、前処理を施した灰白質形態構造画像を用いて両群間で比較した。次に、関心領域（ROI）を設定してそれらの部位の体積を抽出し、18歳未満発症者30名を早期発症者（E0）、18歳以降発症者62名を後期発症者（L0）と定義した。E0、L0、健常者のグループを主効果とし、共変量として年齢、性差、およびこれらとグループとの交互作用を設定し、共分散分析を行った。【結果】VBM解析とROI解析においていずれもOCD患者では健常者と比べて左側の視床体積が有意に増大していた。また、E0はL0に比べ洞察が乏しく、対称性、ためこみ、その他など非典型的な強迫症状の重症度が高かった。また健常者と比較し、E0とL0では左視床の体積が大きく、両側側頭葉内側部（海馬、海馬傍回、扁桃体）において年齢*グループの交互作用を認め、L0はE0に比較して加齢性の体積減少を認めた。【考察】今回の結果に加え、従来の脳形態・機能画像の研究からも視床は強迫性障害の病態で重要な役割を果たしていると考えられた。側頭葉内側部においてL0群で加齢性変化をみとめたことは、L0群ではE0群よりも視覚記憶などが低いという先行研究にも合致し、L0がE0よりもストレスや感情処理過程に関連していることを示唆している。逆にE0において内側側頭葉体積が相対的に保たれていることは、E0がL0と比較して、洞察に乏しく、感情的な葛藤が少ないことと関連していると考えた。